荻野美穂

『ジェンダー化される身体』

（2002　勁草書房　432 P　ISBN4-326-65264-0　C3036　3,800 円＋税）

中　山　まき子

本書は著者が、1988 年から十余年間にわたり、「女という身体として生きるとはどういうことか」を問い続けてきた論考全 10 本と、新たに書き下ろした序章で構成されている。「ジェンダー化された身体」とは「〈女〉および〈男〉という性の違いが所与の大前提として設定された文化の中で、それにそって訓育され、立ち上げられ、生きられていく身体」と定義され、それゆえ「ジェンダー化される身体」（歴史性）を明らかにするという。

論考は、著者自身によって 3 部に分けられている。第一部は、ジェンダー化された身体の歴史を考える思考枠組み/方法論、第二部は、性差や身体がどのように定義されてきたか、定義をめぐる争いや変容の検証、第三部は、身体が一定の文脈の中でいかに生きられたのか、その際の規範・適応・逸脱の生起をめぐる事例的研究に分類したという。

本書の特徴と魅力は次の点にある。第 1 に、生殖機能を中心とした身体的差異、つまり女と男という性の特性や本質と理解されていることごとを、自分の立ち位置を定めて正視し、それらが時代・文化・文脈・言説・実践によっていかに可変的であったかを、複数の事例研究を通して論証したこと。第 2 に、生物学的・解剖学的身体の普遍性や自明性の偽りを示すことで、女が女であることを嫌悪せずに生きていくための必要最小限の条件とは何かを問い続けていること。第 3 に、議論・論証に必要となる分析軸、不可欠な認識、身体感覚にまつわる問題点、身体を歴史的にみる視角などを論理的に整理していること。第 4 に、上記諸課題を論じる際に用いた日欧米の歴史資料・先行文献が丁寧に引用・参照され、後学の者への貴重な道しるべが記されていること。第 5 に、女の身体がおかれている複雑で多様な状況、諸要素、政治性が、著者の優れた筆力によって、選び抜かれたことばと的確で過不足ない表現を駆使して論じられていることである。

「十余年間」という長さに触発され、著者の her-story の一端を紐解いてみたい。初出一覧によれば、第 1 章「性差の歴史学」（『思想』88 年 6 月）と第 7 章「子殺しの理論と倫理」（『女性学年報』88 年 10 月）が初期論文で、88 年といえば、あの『からだ・私たち自身』（原著 73 年刊、以降 14 カ国語以上で出版が続く、松香堂より刊行）が翻訳出版された年であり、著者はこの本の校閲・編集者の一人である。

女性学・女性史研究者として歩み進んでいた 80 年代、著者は「からだ・身体」というテーマと出会い、研究との接合を見いだしたことを、「女性学にふれて 9 年、女性史をやり始めて 6 年、そして女のからだの歴史でいこう！と決めてから 2 年半。自分の人生と『研究』とのすき間がだんだん埋まってくるのが快感です」（『女性学年報』88 年）と記している。

契機ともなった『からだ・私たち自身』日本語版発刊にあたって記されたメッセージ（筆者要約）も興味深い。

“性を扱うことばを明確に記す。「なぜなら女自身が自分のからだをありのままに受け入れ、こそこそ隠したりせずに素直に表現していくことこそ、からだ、すなわち私たち自身への解放の第一歩だと考えたからだ」と。また、同じ地平に立つ者として、からだを通して自らの思いこみや世界を見直すことを誘う。その誘いは男たちにも向けられている。女の本音のメッセージを、ぜひ男にも読んで受け止めて欲しい”と。

つまり本書『ジェンダー化される身体』は、著者の「女＋歴史＋身体」という 3 つの研究軸が出会い「女の身体の歴史」として融合し結晶化していく道程であり、性差正視の姿勢とポジショナリティは終始一貫している。さらに本書では「異性愛体制下の〈女〉の身体にこだわる」と表明さえしている。著者は「生きられた身体の経験を参照することなく、あるいは参照しているにもかかわらずそれを自覚することなく、抽象的で客観的な立場から身体を論じうるかのようにふるまいたくない」（29-30 頁）と述べ、議論可能な抽象化は行っても議論を他人事にはしない。

それは、個別具体的な生殖に関わる問題と問題が生起する場には、政治性や権力関係が潜み、個は政治性を含む社会システムの一部として解釈しなけれ

ばならないという著者のゆるぎない主張があるからだろう。この主張は他の単著『生殖の政治学』（山川出版社、94年）や『中絶戦争とアメリカ社会』（岩波書店、2001年）で具体的に論証されている。

私は、筆力ある著者の論考を各自が丁寧に味わうことを願い、各部や章の具体を各々示すことは止め、次の3点から本書を捉えてみたい。

第1に、性差をタブー視しないという視点である。著者は、性差を考えることと性差別を肯定することは別問題だと釘を差す。過去に性差が、性差別や性別役割分担の固定化を正当化する口実として用いられてきたこと、男女平等を目指す場合、性差を深追いすることから生じるかもしれないマイナス面があること。そのため、男女の異質性よりも同質性を強調することが妥当な戦術として取られてきたことを認めつつも、性としての女のありようを正視し、徹底して考えることを要求し、基本課題とする。

これは極めて重要な指摘だ。2002年春頃から一部のメディア、議員、団体などによるジェンダー批判やバッシングが行われ続けている。その主張とは、大多数の人間は男と女にわけられ、そこには厳然と性差がある、だから性による差（別）は肯定・配慮されるべきだというものである。女性学・ジェンダー研究やフェミニズムは、あるいは男女共同参画社会形成のための政策や運動は、今まで男女の同質性を強調することに多くの力を注ぎ、あるいはセックス/ジェンダー二元論を用いてジェンダーの可変性を強調し、反面、男女の異質性の存在の有無とその根拠、身体的性差の解釈、生物学的・解剖学的決定論との対峙などを後回しにしてきた。その後、ジェンダーがセックスに先行する、あるいは「身体は固定的・普遍的所与ではなく、言説により構築される流動的なテクスト上の肉体存在にすぎない」（18頁）など、新たに編成されたジェンダー概念は、目から鱗の視点転換をもたらした。ただその理論は、徹底した言説的構築とその蓄積を理解しなければ解読不能な難しさを内包しており、また生きられた身体の経験という実感には未だ遠い議論も少なくない。

このように、私たちは身体的性差、これらを含むジェンダー視点の意義に対する具体的研究や理論、説得的ことばを、ジェンダー視点批判者やそうした批判意見に耳を傾ける人々に対して、十分に構築してきたとは言い難い。その盲点を著者は指摘しており、本書は過去から先端研究の動向も含め、さまざまな性差研究や生物学的・解剖学的決定論に対する反証・資料が示されており、咀嚼しながら読むことで批判に対する反論やヒントを得ることができる。

第2に、著者によって開拓された研究分野について述べる。その事例研究は、1）「避妊・堕胎/中絶」（第1章・第3章の随所）、2）医学・産科学が示した男女生殖器の解剖図や骨格図の解釈、これらの修正変更による女の近代的身体形成過程（第4章）、3）科学的性差論が構築した性差（第5章）、4）子殺しの理論とその倫理（第7章）、5）娼婦・売買春と性病に関する衛生学の台頭（第9章）、6）女性美と健康（第10章）と、多岐に渡る。

いずれの研究も開拓的だが、さらに後継や多角的研究が必要であり、「その先」、著者や私たちがすべきことは無数にある。中でも、本書が扱っている身体は「性と生殖」を持つ人生の前半部分の課題が主に取り扱われている。子どもを産む・産まない選択や産めない状況を経て、女も男も老化と向き合う後半生がある。その人生後半に存する「性と生殖」問題に光を当てた研究も今後、必要不可欠といえよう。

なお、著者は身体・性差を言及するに際しては、「自己分析とシステム分析の同時進行という高いハードルを越える研究の重要性」、つまり私を見つめ、見つめた私を相対化し、さらに性差の軸を持ち込んで再び濾過していく作業が少なくとも必要であると再三強調している。この助言を肝に銘じておきたい。

第3に、とくに開拓されなければならない研究分野として、しつこい程に繰り返されるメッセージがある。それは、著者の表現をもじるなら、「男が、男という身体として生きるとはどういうことかを問うことの必要性」である。なぜなら、「男＝精神＝文化、女＝肉体＝自然」という誤った二元論的発想は根強く、「身体を語ること」＝「女の身体を語ること」と同一視され誤解されるが、男もまたジェンダー化された身体を生きていることは間違いない。従って男による男の身体が語られない限り、相互的な視点は伴わず、ジェンダーの動きを総体として可視化していくことはできないからだという。

著者の研究の魅力に触発され、自ら性や身体を語る男たちが増加すること、あるいは増える状況を作り出すこともまた、女性学/ジェンダー研究の重要な役割だろう。

最後に、本書読後に再度「序章」を読むことを薦めたい。序章ではフェミニズムが身体的性差と格闘してきた軌跡が整理され、身体からみた女性学・ジェンダー研究入門・概論として読み味わうこともできる。

（なかやま・まきこ　鳴門教育大学助教授）